

災厄招くは狂乱せし不
滅の月

時空の旅人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自重？なにそれ。反省？時と場合と相手によるかな。後悔？するのかなあ？

そんな自分勝手、理不尽、我が儘な強チート持ちなのに強いか弱いかと聞かれたらしぶといが来るような少女、竜崎りゅうざき 琉奈るなが中心……中心？になるおふざけ満載のお話。オリジナルだったり二次創作だったり短編集のような構造になると思います。

また、この作品は暇潰しとりハビリを兼ねたものになりますので駄文、駄作、その他色々罵倒が付きまとうと思いますが、ブラウザバックをすぐ押せる準備をしてお楽しみください。楽しめるかはさておき。

目次

プロローグ的な第一話	1
茶番観賞な第二話	5
下準備の第三話 (I S)	12
襲撃してみた第四話 (I S)	16
暴走しました第五話 (I S)	20
終戦しました第六話 (I S)	26
眷属製作の第七話	31
補喰しましょう第八話 (G E 2)	36
デート () しましょう第九話 (G E 2)	41

プロローグ的な第一話

ふと目が覚めた。

「久しぶりのお客さんかな？」

ドーナツ場の黒い地面に泡立つ血の池と私作のボス空間が視界に入る。

危険が迫るか此処に誰かが来るかでしか目覚めない私が起きたのだが、脳内アラートが響いてないので後者だろう……たぶん。

1箇所にはかない扉が開き、中に入ってきたのは如何にも勇者な装備の男に女魔法使い、女戦士、女僧侶と言った感じなメンバーだ。ハーレムじゃないですかやだー。

「不気味な空間ですね…」

「邪神は何処に…」

誰が邪神か、せめて厄神にしなさい。根本的に駄目なものには変わらないけど気分的な問題だよ？

とりあえずボスを待つようなので中央の血の池から出るように指示を出す。

それを受信した偽装用ボスが勢いよく飛び出し、勇者（勝手に決めつけた）達はそちらを警戒する。

1カメラから4カメラは配置について、撮影始めるよ！無許可だけどね！（いつもの

「こいつが…」

「なんと禍々しい…」

そうかな？巨大で赤い皮膚、メリハリのない女性の上半身（私ベース）、そこから所狭しと出ている、もがいたような形の人間の腕と苦悶の表情を浮かべた顔の装飾。ハガレンのエンヴィー（デカブツ版）モチーフだっけ？それともぶその禍津だったかな？とりあえず一度置いておいて、その顔は凹凸がないかわりに、目と口の部分が埴輪のような空洞になっている。なお覗き込んだら一般人だと死ぬ模様。私も見てみたけど奥が見えないんだよね、引きずりこまれるような真つ暗闇で。

次にその下、下腹部のあたりに2色の絵の具を混ぜたけど一向に混ざらずに縦縞模様になったような赤と紫の球体。そこにも埴輪よろしく3つの円でできた目と口がついていて、ボーツと勇者達を見ている。

いつぞや分体が迷いこんだピンクの悪魔の世界にいたボスがモチーフとのこと。かわい。でもその回りには黒い骨が囲っていて、守りと引き換えにその顔が見えづらくなっている。誰だ、設計したのは。私だった。

「うっ…」

あ、僧侶ちゃんの気分が悪くなってる。そんなに駄目？まだS A N値削るような構造じゃないだけマシじゃない？ぬるてかな触手とか蠢く肉壁とか。まあ第二形態で触手入るんですけどね、と思わずニチャアと笑う私。

えーつと…：…あ、そうそう。2色ボールちゃんの下にはわかる人にはわかるけどわからない人はググってね？なスカルリーパーさんがついてます。ソードでアートのオンラインゲームのボスエネミー。

口頭で説明しようとしたら…：…ぬらりひよんみたいな後頭部長めかつ眼孔が4つの頭蓋骨にその下、脊椎から上が人間構造の骨…あ、手の部分が鎌になってるからそこは人じゃないね。がついている。その下は延々と脊椎が続いていて、側面からは百足の脚よろしく骨が足として機能、先までいくと針のような尻尾になっている。本来なら。

こいつの場合はその尻尾部分がボールちゃんを囲っている黒い骨に繋がっていて、その宇宙に浮いているせいか足も地についてなかったりする。そもそも真下血の池だから、歩けるわけないんですけどね。

カタカタとリーパーくんが勇者達を見据え（目の代わりに赤い光があるだけだけど）、勇者達が構え（偽装ボスだから茶番なんだよねこれ）、上半身とボールちゃんはそれを他人事のように眺め、いざ戦闘開始！の前にだ。

「分体^{わたし}、ポテチ持ってきて。あとコーラ」

「自分で用意すれば？本体^{わたし}。めんどくさい」

「本体なのに断られた、なんでさ」

ボス空間の天井、あつちからは真つ暗だけどこつちからは普通に見える待機場所で観戦準備をするが、分体が言うことを聞いてくれません。解せぬ。

茶番観賞な第二話

結局分体わたしを色々と脅して、持ち上げ、土下座して持つてこさせるはめになった私は下で繰り広げられている茶番を眺めている。

あ、リーパーくんがやられた。弱い…圧倒的に弱い。いや、勇者と女戦士のごり押しに勝てなかったただけかな？ おおリーパーよ、死んでしまふとは情けない。

「一気に叩くぞ！」

あ、ボールちゃんが攻撃されてる。本人……人？は相変わらずボーツと眺めてるし上は上で後衛を狙おうとして腕が届いてないし…AI調整ミスったかな。

「中の分体わたしが阿呆なんじゃない？」

「アンタもその分体でしょうに」

「本体わたしが阿呆なんだから私達もそうなるのは当然じゃない？」

「なるほって何デイスってんの？ 私本体、分体消せる。OK？」

下は一方的で面白くないからかつい隣のこれに怒りが沸く。なお本人は何処吹く風

の如くスルーである。実際やったら分体達わたしたちに下克上されかねないから仕方なく削除は無しだ。何で煽ってくるのかなー、こいつ。私なんてせいぜい指差してぶぎやあwするぐらいなんだけど。助かりました連打ぐらいなんだけど。民度低いのかな？（ブーメラ

ン
あ、リーパーくんが復活した。驚いてる驚いてる。

ん？勇者達が下がって…あ、ちょ、リーパーくん届かないのに鎌振らない。上も無駄に腕振らない。うわあ、僧侶ちゃんが良い笑顔浮かべてる。勇者も剣を一度戻して手のひらを向けて…魔法ぶっぱでリーパーくんがぼろぼろに…

「……魔王より弱くないか？」

「そう…ですよね」

「見た目だけ」

「そうと決まれば作業になるな」

ああ、今度アプデしないと…隣は爆笑、1カメラから4カメラも声を抑えて笑っていて私の気分を害して楽しいのか、お前らあああ！

『今さらでしょ』

ひどい…

〈1時間経過〉

戦闘能力では問題なくても体力・精神は疲労するようで、何かしらの薬で回復はしているようだけど一部飲みすぎで苦しそうだ。特に魔法使いちゃんが。

「うっ…まだ倒れないんですか…」

若干ボテ腹気味で涙目な彼女をお持ち帰りしたい気分ではあるが、そろそろ倒されそうなんだよねー。ボールちゃん。押せば落ちそう。

次に疲労してるのが意外にも勇者というか、漸く精神汚染が女戦士に効いてそれを止めるのに体力を使ったようだ。まあ全力とはほど遠い力でしか暴れないので同等以上の能力があれば止めるのも簡単なわけで…

僧侶ちゃんは余力を残して警戒してます。こういう人がいると厄介だよね。それに精神耐性上げられてもう汚染入らないと思うし。

「これで…落ちろおおお！」

必☆殺ブレイブソード、ボールちゃんは力つきた。

上半身はその体表の装飾のようにもがき苦しんで消えていき、ボールちゃんは血の池に落下していった。

今までになかった^{行動}演出に漸く勝利したと思った勇者はその場で座り込む。

僧侶ちゃん以外は気を抜いているけど、止められるかな？ どうかなー？

「これd「ボコボコ…」……おい、まさか…」

何やってんのさ、そこは不意打ちでしょ？ 今から出ますよー、つて教えてどうするの？ 馬鹿なの？ 阿呆なの？

「だから私達は「わかったから黙って」

認めるのやだなー。こんなのつてないよ、あんまりだよー（棒）。

で、まあ下に視点を戻しまして。泡は少しづつ水…というか血柱に変化していき、飛び出しましたは私と同じ美少女ボディに埴輪顔を張り付けたパチモンのようなもの。服の代わりに眼孔や口、各部関節からびちびちと飛び出している触手があちこちを隠している。

これ触手ガードなかったらセクハラじゃないの？ ええっ？

そんなことを考えている間に触手ちゃんが魔法使いちゃん目掛けて全力前進☆DA
！とはならずさかさず立ち上がった勇者に妨害されました。駄目やん。

「ひっ…」

「あつぶねえな…」

「キイイイヤヒヤッヒヤ！」

「ちよつと何言ってるかわかりません」

「わかったら可笑しいだろ…」

僧侶ちゃんちよつと余裕ありませんかね？と私達会議を行いながらも状況に変化無しである。やつぱり見た目ばかり意識してスペック酷すぎたかなあ…

ていうか触手も触手でびちびちとなつていただけでまともに機能してないんですけど……誰？触手のAI半端で済ませたの？……私か。

「!?きやつ!!」

ん？お？おおつ？どうやら止められたのはわざとなようで、血の池経由で触手を伸ばして魔法使いちゃんを絡め取つたようだ。すぐさま両手両足を縛り、自身の近くに引き寄せ口に触手を突っ込む姿はアブノーマル以外の何でもないよね。まあ魔法防ぐのに詠唱させないのはわかるけども……けども、ローブの中漁る意味ないよね？服の中漁る意味ないよね？ちよつとそこ変われエロ触手う！

『……』

「うわ、分体達わたしたちからのジト目きつい…」

何で分体作ると性癖が作用されてなかったり理解されないんだろ……いいじゃん ガールズラブとか爛れた同性愛、経験ないけどさ。

とか思つてる間に復活した女戦士が魔法使いちゃんを救出してました。触手、お前はいいやつだったよ……だから○ね。

その想いが届いたのか、顔を赤くしてお怒りの魔法使いちゃん情け容赦なく触手を消し飛ばしました。いやー、ボスってなんだっけ…裏ボスのはずなのにこの難易度。笑いが止まんない（棒）。

とりあえず手元に押しボタンを用意します。回線繋がっているか確認します。それではポチつと。

「な、なんだ？」

「まさか崩落するんじゃない？」

「扉も開いてる…いや、でも…」

「潰される前に脱出するぞ！」

ギミックが発動して部屋全体が振動し、壁に張り付いたり天井…でいっか。に張り付いたりしていた岩や装飾がどんどん落ちていく。ボスが倒れたら部屋が消える。ゲームでもあると思います。いや、ないかなあ…

唯一僧侶ちゃんが納得してないようだけど勇者に連れられ、この空間から出ていった。出ていってしまった。

「はいみんなお疲れー」

『お疲れー』

もう一度ボタンを押しギミックを停止させ、片付けに入る私達。

1日もしない内に本体は眠りについてしまうだろうけど、その前に魔法使いちゃん拘束映像を目に焼きつけることをここに誓おう。え？カットした？1〜4カメ全部？
そんなー…

結局、暇潰し用の分体を量産する事しかできなかつた私であった。

下準備の第三話 (I S)

「そうだ、何処かでオリ主にちよっかいかけてこよう」

『は？』

分体の中でも自由班の私は、忙しそうに眷属の事や複数世界の情報を整理している情報班の前でそう呟いた。

案の定殺意や敵意の籠った目を向けられるが、気にしないのが吉だ。

今さらになるけど、分体というのは私達の持つ異能の一部でもって創られたそこそこ本体に近い偽物である。作り方も色々あつて裂けたり千切れた体から再生したり再構築したものや、《模倣》で覚えた《刻々帝》^{ザッキエル}という天使（という名の特殊な武装又は能力）から八の弾^{ヘット}という自身の過去を再現した分身体を生み出す銃弾を使って増やしたり、《創造》で同じ構造・精神のものを作つたりしている。《刻々帝》^{ザッキエル}のデメリットに關しては不老かつ寿命による死がない私だから無いものと思つて良さそうな感じである。

我ながら私自身の持つ《創造》の万能さと特典である《模倣》の便利さには呆れるね。

特典と言っても転生じゃなくて拉致のお詫びだけど。もしお兄ちゃんが転生してたら同じ能力が良いって伝えたら予想以上のチートが貰えたというね。これにはペド神も予想できなかったようであっさり去勢させてもらいました。ざまあ。そもそも能力与えようと思つた理由が今でもわからないよ。

「じゃあいつてくるー。楽しめたら喋りに来るねー」

『来なくていい』

遠慮しなくていいのになー。

やって来ました、オリ主が確認できたインフィニット・ストラトスの世界。機体はガンダム系っぽいね、オリジナルとガンダム系の敵機体のどっちにしようかな。作る機体は。

同じ自由班に声をかけて、一部には資材班にお願いしにいつてもらって作戦会議といこうか。以下会議の風景を一部抜粋。

「どうちよつかいかける？無人機？有人機？」

「無人機量産して自爆特攻」

「ガガでいいじゃん」

「暴走班を唆して送りつけるとか」

「いいね」

「相手の機体に合わせる？」

「暴走班に原作再現みたいなのにしたら駄目だし、オリジナルでいいんじゃない？」

「いつそのこと自由班からも1人出そっか」

「いいね」

「能力と武装どうしょ」

「可愛い女の子多いんだし趣味全開で」

「いい」「さつきからいいねしか言っていない馬鹿はお前かあああ！」ペンチやmぎいやあああ!」

「……じゃあそこら辺は作りながらで」

「おk」

こんな感じである。

なおいいねの私はその後、コンテナに詰められその上からペンチでスプラッタにされてました。合掌。

3秒ほど記憶に残し、自由班総勢9人で作業を始める。別のIS世界で篠たぼちゃんノ之束から《模倣》した技術もあるし、何も問題なく進むだろう。楽しみだなー。

襲撃してみた第四話 (I S)

自由班から4人と暴走班から拉致連れてきた幼女タイプのおとなしめの子の1人の計5人で移動中の私達。結局自由班が乗る機体でガンダムが1機しかない。3機はパイロットが同じ人の機体で、何でも生存祝いだそうだ。

オリジナル……と思って作つた機体は結果的に元ネタのある改造機体となつてます。見た目的には I S から離れすぎていてわからない機体がさらに別方向にぶつ飛んだみたいな状態だけ。

今現在も、操縦者たる幼女の分わたし体が乗っている頭胸部から伸びた第一く第四步足で海面を歩くように移動している、蜘蛛型 I S の《ヴァリアント変異鏑朱》である。元が6足だったものが8足かつ足長構造になつているための変異だ。まあ正直に言えばアラクネの方が近いけどね。

海面を歩いてるように見えるのは、バッシュ・イナーシャル・キャンセラ P I C が常時発動できるのが足の先だけで移動するには足をわしやわしや動かす必要が……ね。勿論空中にも足をかけられ

ば変態軌道もできません。自由班わたしたちでは動かすのも辛かったけどね…

それはさておき、腹部は鳥籠ケージになっていて、背面がエネルギーネット用の大砲になっている。ここはそのままだね、弄るところなかったし。なおサイズの影響か、2人3人までなら無理矢理詰めれますよ。

そして歩行用だけの足ではないのがこの《変異鎧朱》で、何と象の足のように先が広くなっている足の先の中央は大砲となっている。ここからプラズマガン撃つたりエネルギーネットを撃つたり、エネルギーワイヤー付きエネルギーネットを撃つたりって結局捕縛用。これはひどい。

更に捕まえて引き寄せた相手を掴むための3本クローが内蔵。そしてそしてってそろそろ着きそうだ。残り2つだったかな？機能は。その説明は使っていたらにしよう。IS学園側には襲撃がバレてるし。何故かって？それはだね。

「わーいわーい♪」

はしやく幼女のは置いておいて。この《変異鎧朱》、頭胸部で2m、腹部4m、足にいたっては長さを統一して関節を減らしてても、頭胸部と繋ぐ第一の関節、腿部分最短4m最長16m、第二の関節（膝）が入って脛分体は腿部分と同じ、足の先が3mかつ先ほど言ったように象の足のように広がって先はなんと太さ1m。踏む潰せば強そう。とまあこんな最長35mに届く最早ISの要素がその機能だけなこれは凄く目立つ。

ほら、こっちに向かって専用機持ち達が飛んできている。さて、ちよっかい開始だね。

例の3機の内の1機、フラッグの私は声を変えMA形態に変形（その際やばそうな音と「いったあ…!?」と聞こえたのは幻聴です）し加速して、例のオリ主君に「会いたかった、会いたかったぞ！ガンダム！」と言つて突撃しました。

「グラハム!?何で!?!」と動揺してる間に「抱き締めたいな、ガンダム!」と再度変形、MS形態に戻りタックルしそのまま拉致つた。

水色髪的眼鏡ちゃんが慌ててそちらを追おうとするが3機の内の1機、ブレイヴの私が妨害。最後の1機、スサノオの私は織斑一夏の前でその手のブレードを向けている。

「この私、……えーっと……ルナハム・エーカーは、君との果たし合いを所望する!!」

『ぶはっ!!』

当人除く自由班、吹き出す。キャラ名そのまま使えばいいのに何で混ぜるのさ。ほら、せつかくオリ主君を分断したフラッグの私が専用機だろう黒い獅子がモチーフの機体、バンシイ・ノルンに蹴り落とされた。ブレイヴの私もむぎむぎ《山嵐》というマルチロツクオンミサイル撃たれてるし。無事とか変化ないの幼女のだけじゃん。てか一期ヒロインズ+シスコンが相手のはずなんだけどあの子、やっぱり暴走班は怖いなあ……あ、ブレイヴのが妹ちゃんをヒロインズの方に無理矢理合流させてきた。さて

さて、私は大人しく観戦しますか。

暴走しました第五話 (I S)

この世界でオリ主の立ち位置にいる獅子劫ししこう 悠真ゆうま v s フラッグの分体、原作 I S 世界アイエスに置いて主人公の織斑おりむら 一夏いちか v s サノオの分体、原作ヒロインズの7人 v s 幼女の分体という構図になっている海上戦。ブレイヴの分体は幼女のの近くで傍観している。

残り1人の分体は光学迷彩を使用することで姿を消して観戦していた。オリ主のところはちよつかい、一夏のところは足止めなのでヒロインズと幼女ののところに集中している。

「るなとあそぼう!」

「こんな小さな子供を…!」

《変 異 鎚 朱》から繰り広げられる8本足による連続攻撃を避け、時には刀型の武装

《空裂》と《雨月》で防ぎ、受け流しながら怒りを募らせる篠しののの 箒ほうきとその専用機の

《紅椿》あかつきはき。 鳳フウ 鈴音リンインとシャルロット・デユノアによる左右からの挟撃は相手の射程ギリ

ギリに入ったとたんに向けられる足が邪魔で近寄ることができず、鈴音の専用機《甲龍》シエンロン

の第三世代兵装〈衝撃砲〉やシャルロットの専用機《ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ》の武装、アサルトライフル〈ヴェント〉による攻撃も長い足の先、太い部分の外装の固さでもってあっさりとは防がれてしまう。

それに合わせてセシリア・オルコットの専用機《ブルー・ティアーズ》の武装〈ヘスターライトmkⅢ〉と第三世代兵装〈ブルー・ティアーズ〉（機体名と同じで紛らわしいが、そもそも機体名の由来がこちららしい）のビットからレーザーが放たれるが足の一部を伸ばしたり縮めたり、まともに当たらせてはもらえない。

「何なんですよ、あの動きは…」

「ふむ、幼いながらあれほどの動きを見せるとは。ぜひ黒兎隊に入ってもらいたいものだが…」

呆れるセシリアの隣で冷静に動きを観察するラウラ・ボーデヴィツヒ。

正面で避けていた筈と入れ替わるように更識さらしき 楯無たてなしと専用機《ミステリアス・レイディ》、その妹の簪かんざしと専用機《打鉄うちがね・式式》が受け持ち、鈴音とシャルを含め3人も合流する。

「何であんなぼんぼんと衝撃砲避けれるのよ…」

「僕だつて一度も有効打与えれなかつたよ…」

「だが攻撃に関しては素人そのものだ、回避は本能的に避けられてもそちらはどうにも

ならん」

「お姉さん達とも遊びましょう?」「はい!」と戦闘中にも関わらず和むやり取りを尻目に対策や攻略法を議論する。

時たま隙を見せたとラウラの専用機《シユバルツァ・レーゲン》の大口徑リボルバークノンが火を噴くがやはりこれもすんなりと避けられる始末。

「ハイパーセンサーではなく本人の勘だろうな。撃つ前に動いていたぞ?」

「勘だけで避けられるのは納得がいきませんわ!」

「私の〈清き激情〉クリア・パッションもなんとなくて逃げられていたのだけど?」

いつの間に交代したのか、楯無と簪が合流し代わりにラウラ、シャルロット、箒が向かっていった。ラウラに関しては恐らくレーゲンの第三世代兵装へアクティブ・イナード・キャンセラ A I C

を試すためだろう。

なお簪は観察6割:心配4割で悠真の方の戦闘を見ている。わずかに目を向けた一夏の方は観察10割である。ただ、心配が観察よりも多くないのには理由があり:

「……やっぱりゲームとアニメで見せた動きは淀みないけど、それ以外だと素人:」

…ということである。

自由班として大して戦闘もしない彼女ら分体達は、《模倣》によつてできる達人的な動きと素人の動きが混じったちぐはぐな存在である。

特撮やヒーローもの以外にもガンダムのようなロボットものも見ている彼女ならではの目線だ。

そしてそれを越えるガチのガンダムオタクな悠真は現在、動きを完全に見切りフラッグのをフルボッコにしていた。

そこまで確認した簪は視線を幼女のに戻し、自分も話に加わる。

「…悠真の方は圧倒し始めてた」

「あら。それなら終わったら合流してもらいましょ、一夏君のところは決闘みたいだし」
「ぶー。あたらない、つまらない」

こちらはこちらで足が当たらず機嫌が急降下してきた幼女のが、何をしでかすかわからず警戒を解くことができない。その場でしばらく地団駄のようにじたばたしていると思えば急停止。にぱーっと言う表現が合う気の抜けそうな笑顔をした彼女が次に取った行動は…

「まぎちらせー!」

…エネルギーネットの乱射である。それも錆朱の頭胸部にて パツプ・イナーシャル・キャンセラ P I C を起動しその場で回転、空いた8本足の大砲と腹部の背中側についた2門の計10門による連続射撃である。

幸い海上なので壁に張り付きトラップに、ということにはならないがいかんせんぐる

ぐると回る足を避け、突撃してきた頭胸部と腹部を避け、飛んで来るエネルギーネット全てを避ける等という行動を全員取れるはずがなく。

「くっ……！」

専用機こそ持っているが最もI Sの操作に慣れていない筈にネットが付着。それを敏感に感じ取った少女のが回転を止めエネルギーワイヤー付きのネットを飛ばし、ワイヤーを切られる前に素早く巻き取りその足に引き寄せ、アームで掴むはずが間違えてそのまま殴ってしまった。

強大なパワーアシスト+巻き取りの勢い+大質量の足による一撃で吹き飛んだ筈と紅椿は粘着性のあるエネルギーワイヤーがゴムのように伸び、再び足に引き寄せられ今度こそアームで掴まれ、捕まる。

「……あは、あはははははハハハ！」

『えっ？』

突如狂ったように笑う少女のに、捕まっている筈を含むヒロインズが困惑する。

なおこの時その他分体達に関しては『えっ、っ』と嫌な予感が過っていた。

「るなはオモチャデあそぶ！こわレルマデあそぶノ！」

まるで水ヨーヨーのように紅椿を殴り引き寄せ殴り引き寄せとしていく狂った少女の。そんな暴走条件わかるか！とすぐさま鎮圧行動に入る自由班。その慌てように筈

が危ないと焦るIS学園側のメンバー。

「オにんぎよう！もツテかえル！」

そして幼女のに目をつけられるラウラ。ちよつかいから始まった戦闘は混沌として
まだ続く…

終戦しました第六話 (I S)

「未来への水先案内人は……このルナハあああ!？」

「武士道とは死ぬこととおお!？」

「アハハハハハハ!？」

「……なにやってんの、あの阿呆共」

ブレイヴとスサノオの分体わたくしが突撃して、いきなり叩き落とされたのを眺めながらそう呟くのはフラッグの私。もう1人は隙見て大きいのをぶっぱしてもらうので、未だに光学迷彩を使つて消えている。

後ろを見ると I S 学園組が私を警戒してるし、前に視線を戻すと《変 異 鏑 朱》ヴァリアント・ヴァーミリオンの分体は他2人を鬱陶しそうに叩き潰そうとしながらもラウラを凝視している。てかいくらハイパーセンサー積んでるからって欠片も意識向けられてないじゃん。ざまあ。

「さてさて。あの子が暴走しちゃったので私達はあれを止めるけど、邪魔しないでもらえるありがたいかなあなんて。むしろ手伝ってほしいと思っております」

「…さつきまでは変声器でも使っていたのか」

「Yes! その通りでございませう。とりあえず協力してもらえら情報送るよ? あの子の狙いはラウちゃんだけかどうかどうする?」

「貴様にそう呼ばれる筋合いはない」

銀髪兔ちゃんに拒絶されorz状態になるが、まあいつもの事かとすぐに立ち直る。にへらと笑うがフルフェイスなので見られることもなく、そのせいで気味悪がられも注意されもなくて少し残念である。

「因みにあの機体、接触してるだけでエネルギー奪うから決めるなら早めにね☆」

「…っわかった。協力するよ」

「モツピーも聞こえたー? 《絢爛舞踏》は使わないでねー?」

「誰がモツピーだ!!」

とりあえず了承は貰えたのでコアネットワークに割り込んでデータを送信する。それを見た面々は呆れたり(酷すぎて)絶句したりしてる。実際武装を並べると…

・近接用装甲足×8 (エネルギー砲内蔵)

・腹部エネルギーネット砲×2

・頭胸部内蔵パイルバンカー(ポイズンファング)×2 "New"

・接触型エネルギー吸収機能(アブソーバ) "New"

…こんな感じである。いや、ほんと、エネルギー砲もほとんどエネルギーネットしか撃たないので、火力があるのがパイルバンカーだけというこの歪な機体でよくもここまでするなあと。時たま飛んで来るネットを処理しつつ準備ができたであろう学園組に顔を向ける（見えないけど）。

「最優先は救助で、隙が出来たら隠れてるもう一人が破壊するからそのつもりで」
「まだ仲間がいたんだね…」

元男装金髪女子が呆れてるが普通じゃない？

「伏兵は常識じゃないかね？シャルル君や」

「僕はシャルロット！」

「とりあえずおりむーも零落白夜で狙えたらよろー」

「お、おう」

ふはは！おちよくると面白いねやつぱり。後はオリ主君にもこれ渡しとこう。

「はいこれ」

「おい。どうやってこれを」

「マグナムで弾幕よろしくねー」

「……大丈夫なのか、本当に」

ビームマグナムのカートリッジを持てるだけその場で創造し《作つ》て渡し、他には

これといつてないので《変異鎗朱》に向かつて飛ぶ。狙いはワイヤーの切断！と突っ込もうとして急ブレーキをかけたなら目の前を通り過ぎた足が一本。……もう少し慎重にしよう。スクラップになるのはさすがに嫌だし。

そして学園組も混じった幼女のの鎮圧戦（ここだけ聞いたら大問題だね）は剣道ポニテ娘を救出し、代わりにスサノオのが捕まえられるところまで進んだ。

足一本につき一人を狙っても捕まっていた掃除用具ちゃんを除くヒロインズ6人、オリ主君、私達3人の計10人で攻撃していたからか、唐変木君がフリーとなり足を切り飛ばして有利になっていった。助けた時には足が5本になっており、手数が減って近づけたスサノオのが成し遂げたのだ。

『やっちまえー！ルナー!!』

3人揃って待機してた一人を呼ぶ。まだ捕まってるのにだのなんだの学園組が五月蠅いが遠ざけて、気にしないでおこう。

「バルバドスじゃないんだけど？」

そうぼやきつつ光学迷彩を切って現れるのは、黒がメインカラーに一部青く光る装甲、手や関節が黄色い極限の名を関するボス機体が4機（内3機は分身）。それぞれの背中からは紫色の蝶を模した光の羽根が生え、輝いている。それはとあるシステムのデータを元に作った〈希望蝶〉。《変異鎗朱》にぶつけるとシールドエネルギーを消し飛ばし

ていき装甲を砂のように分解し、訳がわからないといった顔の少女のだけが残った（なお巻き込まれたスサノオのも分体だけを残して機体は塵と化した）。

少女のを回収し、後は任せたと消える分体を見送り機体無しを回収していた私達は首を傾げていたが、学園から来た何かに悪寒を感じ恐る恐る振り向いた先には：

「貴様らには聞きたいことがある。抵抗はするなよう？」

『イエス、マム！』

ブリュンヒルデ世界最強さんでした。奴め、見捨てたなあああ!?

捕まった分体達3人はしばらくI S学園で厄介になるのだが、これはまた別の話。

眷属製作の第七話

我々研究班は情報班以外の班と比べると忙しい。どのような眷属にするか思索し、実際に眷属を生み出してみて実験（本体が生み出した無人世界と有人世界で行っている）し、改良すべき場所が出れば処理してから直すという作業を延々と繰り返し返している。なお、研究班から暴走班に入れられる者は大抵実験場所を他の神の管轄で行ったり、処理をせずに研究に戻ったりする愚か者達である。本日も2人ほど暴走個体として処理されていた。

私は粛清や殺戮に関する眷属を担当しているが、実のところそういうのは既存の作品の生物を送るだけで十分だったりする。特に殺戮という点においては居るだけで周囲を殺すような毒を撒き散らす生物や、動けば星が危ないような化け物等探せば沢山いると思う……たぶん。

そういうわけで粛清用眷属の製作が主な仕事だ。今までも、その分体が復活できないように分体の魂を刈り取る死神タイプの魂喰らいや、分体達の持つ《虚無》や《創造》に

よる耐性や無効化のみ貫通する石化を使える魔眼蛇マジリスクといったものができている。

とは言え、魂喰らいは独特の雰囲気を持つらしく気配察知ができる相手には返り討ちにあい、魔眼蛇は射程が数メートル程度と貫通能力の代わりにそこが犠牲になっているため遠距離から潰されてしまう。

ボールラビット首刈り兎を創ってみたりもしたが、物理のみに特化してるからかそもそも再生されて食事にされる始末。

封印に特化した聖職者型の人形は封印が完了する前にがらくたにされた。

ドラゴンのような大きく能力もある生物でも、そもそも正面から戦うと暴走班の個体の方が上だったりする。その上目立つためその世界の住人には迷惑をかけた。

ドツペルゲンガーのような模倣能力を持った眷属をぶつけたりもしてみたが、現状では完敗である。何故だ。

「必要なのは何かしらの隠密能力と再生を妨害するか魂に干渉できる能力」
魂を抜けば始末できるのは間違いないが、再生能力が厄介なのが問題だ。

再生能力が低いものでも腕や足さえ残っていれば再生するし、本体に近いものは血溜まりや指一本、髪の毛の束から再生する。まあ本体が血の一滴、皮膚片一つ、髪の毛一本からフレイム単位で復活するのに対して、数十秒かかるだけましなのだろう。黒光りするG並にしぶといのは変わらないが。

とりあえず既存作品のとある生物は不死者を好んで襲い、長く味わうために数十年かけて消化するという。そういう部分は積極的に入れていくべき……なのだろうか。数十年あれば腕が消化されるより先に体を始末され、腕からまた再生されるなんて事もあり得る。

では魂に干渉できる方を作ろうとすると、今度は深刻な基礎ステータス不足が発生する。例が魂喰らいだ。

あれは鎌さえ当てれば分体を殺せるが、逆に言えば鎌以外が雑魚である。姿を消して近づくこそすれ、気配駄々漏れでやられる。なのでそういった干渉能力はオマケ程度、器である体を壊してから使えるようなレベルにしよう。

そして隠密能力は基礎ステータスや干渉能力に応じて変化する。強くしすぎると気配が強まるか、体が大きくなるかするのでバランスを考えなければならぬ。難しいものだ。

「とりあえず試作品がこちら」

肘から先が地面から生えた右腕さんである。地面ないし壁からしか生えられず、移動速度もせいぜい歩く速度、耐久値は低くその上悪霊タイプなので塩でやられる。……もろパクリである。でも実際この右腕さん、メリット部分はかなり強い。

まず悪霊、すなわち霊なのでそういう眼がないと見えない。魂喰らいは実を言うとき

系にしてなかったので姿隠しは後付けなのだ。

次にその力は掴んだものを離さず透過して引き込み、そして地面や壁の内で残さず食べるように作られてるので肉体の再生を封じられる。肉体を食べた後のとどめとして魂に干渉してそちらも食る。

そして何と群れで作れる。構造が簡単だからこそその生産性だ。弱点を多くしたから気配が強いということもない。

「そして試作改良型がこちら」

2 mの塊から無数の腕が生え、さらにその腕からも無数の腕、さらにさらにと腕がひたすら固まってできた4 mほどのゴーストボール、左腕さんである。

こいつはひたすら転がり、接触した分体を引き込み、ボール内部でそのまま食らうという移動速度を高めたものである。塊は右腕さんを圧縮してできたものなのでこれも霊系に入り、眼がないと見えないのは変わらない。

ただ、右腕さんの群れよりも多い数の左腕の塊なせいとか、1本あたりの腕の食事が少なくとも足りないらしい。空腹で我々研究班に食いついて来なければいいのだが…

「とりあえず実験しようか」

そういえば、だ。私は誰に向かって説明していたのだろうか。

その分体の実験は大まか上手くいったように思われたのだが腕達の空腹は予想よりも大きく、脱走した腕がちらほらと出では暴走班以外の……それこそ現地民を襲い、見事に暴走班の仲間入りを果たすこととなるのはしばらく先の話。

補喰しましょう第八話（GE2）

「これが、ブラッドアーツだ」

数体のオウガテイルと呼ばれるアラガミを、ロングという中型サイズのブレードを溜めてから一振りの技で倒した目の前の男性、ジュリウス・ヴィスコンティ隊長がそう言った。

現在、新人ゴッドイーターの俺こと神威ヒロと同期の香月ナナは黎明の亡都と呼ばれるエリアに来ており、実地訓練（という名の実戦だったけど）を受けていた。俺達ブラッドは皆少し前に見せられた『血の力』、そして『ブラッドアーツ』を持っているとのこと。その説明のために後から沸いてきたアラガミを相手に使ってくれたのだ。最後にどう伸ばしどう生かすかは俺達の意志次第という一言を頂き、帰投準備に入ろうとしたその時だった。

『緊急!! 現在そちらに中型種のアラガミと、それを追う偏食場パルスを確認しました！

この反応はコンゴウと……』

「恐らく『彼女』だろう。……運が良かったな、新入り達の顔見せをしてから帰投する」
『了解しました。お気を付けて』

オペレーターのフランソワソワフラ……長いからフランさんと呼ぼう。その人からの通信を受け一瞬で臨戦態勢に入ったと思つた隊長は、その『彼女』とやらと判断して気を抜いた。気を付けるように言われたのに大丈夫なんですかね？

『彼女』ってどんなアラガミなんだろうね？」

「いや、そこはゴッドイーターじゃ……」

「どちらも正しく、そしてどちらも間違いだ」

ナナが小声で聞いてきたのでそう返し、そこへ隊長からそう告げられた。いや、どっちも……それ敵の可能性もあるんじゃない……

そうこうしている間に高台から走ってきたのは猿のような外見的特徴とパイプと呼ばれる部位を持つ中型アラガミ、コンゴウ。飛び降りてからもこちらに見向きもしないで走り出す姿は、どう見ても天敵から逃げる獲物のようだ。

「来たぞ、あれが『彼女』だ」

コンゴウが来た場所からコンゴウの数倍速く向かってくるそれは、両肩から先がアラガミのようになつており両手で二振りの神機のような何かを持ち、ツイントールに纏めた髪を靡かせ疾走する少女の姿をして『何か』だった。……うん。確かにアラガミじゃ

ないしゴッドイーターという人間なのかという疑問も浮かぶよね。今も何もない空中で(恐らく)空気を蹴って加速、その勢いでコンゴウの正面に回り込み、慌てて方向転換したところに両手の神機モードキを叩き込んで三枚下ろしにした。

そして沈黙したところに両方の神機モードキをプレデターフォームに変え補喰している。コアだけじゃなくその軀も残さず喰うように。

そこに気にせず近づいていくのは我らが隊長、補喰に夢中になっていた少女もすぐ傍まで寄られると気づいたようだ。

「お前は相変わらずか、久しぶりだな」

「おー、ジュリウスさんかー。久しぶりー」

先ほどまでの様子とは随分違い語尾が伸びた口調と弛んだ表情で話し出す少女は、コンゴウを追っていた『彼女』とは別人に見えた。とはいえ、今も左手の神機は補喰を繰り返しているので違和感が半端ないが…。

近寄ってみてわかるが、神機モードキを持つ少女はあまりに小さく、元ゴッドイーターだったとかには見えなかった。見た目の年齢的に。

そして一言二言何かを話していた隊長は少女の意識をこちらに向けさせた。

「紹介しよう。第二期候補生の新入りが二人だ」

「えっと、神威ヒロです」

「私はナナ、よろしくねー。あ、おでんパン食べる？」

「ヒロさんとナナさんだねー。私はルナだよー、よろしくねー。それと貰えるならぜひー」

お互いに自己紹介をし、反応に困るナナのおでんパンを喜んで受け取った『彼女』改めルナは、それをバリバリゴリゴリと美味しそうに召し上がった。串とか刺さってるし、それ以外にそんな音出るもの入ってないはずなんだけど……。ていうか今右手で受け取ったけど神機モドキは何処？それに今手に持つてるのコンゴウの一部だよな？まさかそれを、ってやっぱり普通に食べたああ!?何なのだろうこの子、人型のアラガミだって言われたら絶対納得するんだけど!?

「アラガミも美味しいけどー、このおでんパンはもつと美味しかったー。また会った時に頂戴ー?」

「いーよー」

おでんパンを通じて仲良くなる二人、それを冷静に眺める隊長に内心ツツコミだらけの俺。

しばらくして彼女が次の獲物を探しに行き、不思議な邂逅を終えたのであった。

その後、

「…空腹ではなくて良かったな」

「あの、それってやっぱり…」

「……………限界を迎えると人間も食べるらしい。もつとも、彼女の移動速度と討伐速度からその事例は未だにないが」

そういったやり取りを隊長と交わした。

なお、今後とも頻繁に遭遇する事になるとは思ってなかったが、それはまた別のお話。

デート（）しましよ第九話（GE2）

極東から離れた異国の地。そこでアラガミを狩っていた青年はふと何かが迫ってくるのを感じた。それは自分が知ってる気配で、自分を目標にして地響きを鳴らしながら駆けてくる。

「ユウー!! 久しぶりー!」

「うわあ…」

青年、神羅ユウの元に向かうその気配は『彼女^{ルナ}』で、気づいたユウの顔はとても嫌そうな表情に変わっていた。極東付近で活動しているはずの彼女が来た理由は不明で、その上どうやってここを嗅ぎ付けたのかもわからない。

そして嫌そうな表情の理由の最たるもの、それは少女が普段使う神機モドキの形はバスターなのに対し、ショートだからであった。何故ショート装備が嫌なのかというところ――

「相変わらずユウってば美味しそうねー!!」

——対神薙ユウ専用装備なのである。ゴッドイーターとして現状人類最強のユウ相手では、ある意味最強の人型アラガミであるルナでも普段のバスターでは一方的にやられるのである。

……別にこのユウは特典を得た憑依者とかというわけでもないのであるが、ルナに狙われ撃退し時には共闘し、ということを繰り返した結果が人類どころかゴッドイーターから見ても化け物な人物となったのだ。

そんなユウを襲う時だけは彼女もショートを使わざるをえなかったのだ。

「だから喰われてあげられないって」

「えー!? 私はユウが大好きなのにー!」

「食料としてでしょ?」

左右から振るわれる神機モドキを紙一重で避け、時に自分の神機で弾き、場合によっては空いている左手で剃らし、彼女の猛攻を軽く捌いていく。隙を見て近くのアラガミを彼のみが使えるようになった硬直のない補喰で噛み殺しバースト状態になり、二人は高速で移動していく。なお近くを通ったアラガミは全て処理し、彼女がバースト状態になれないようにしつつ自分は維持していく。

「ならユウが私を食べてくれてもいいよー?性的にー」

「しないって…」

「でしょー？だから私が食べるんだよー」

「物理的に？」

「色んな意味でー♪」

「……………」

捕まったら終わると思い、気合いを入れるユウ。そんな会話をしつつも二人は加速していき、もはや神機ではなく体に接触したアラガミが死んだりもしていく始末。

遠目に見ているアラガミ達は逃げ出すが、ユウはバースト維持、ルナはバースト化のために逃げるアラガミを巻き込んでいく。なおこの間も全てのアラガミはユウが倒している。

「ユウのいじわるう…」

「こうでもしないと余裕で対処できないからね」

結局一度たりともかすらせず、ルナが諦め神機モドキをしまったところで移動しながらの戦闘をやめる。通ってきた方を見るとそこには死屍累々とアラガミの残骸が散らばっている。

同行者がいなくて良かったと思いつつ、ここに来た目的を聞くことにした。

「それで？僕に用があつ「んっ」た……んじゃ……——」

いつの間にやら左手を捕まれ、人差し指を甘噛みされていた。いきなりの事で思考が

停止したが、幸い久しぶりの再開からの興奮が冷めたのか喰おうとする気はないようだが、これはこれで問題だらけだ。

「んんっ……ユウの味……いい……♪」

「——じゃなくて！」

「(ゴ、ゴ)めんなさいい……」

無理やり引き剥がして正座させる。反省しているように見えるが欠片もしてないのはいつものことなのでそのまま話を促す。

「実はブラッドつてところの新入りにねー、ユウの時みたいにびびつと来る子がいてねー？」

「」

………御愁傷様、とその新入りに心の中で合掌する。ユウ自身、何かが彼女の直感に引つかかったからこそ今でも追いかけて回されている。

だが合掌と同時に新入りには感謝もしている。自分以外で積極的に襲われたというのを聞いたこともなかったので、上手く新入りが育てば彼女にかけられる負担が減るからだ。まあそれまでの間に何度襲われるかはわからないが……

「ねえユウー？もう少し噛ませてえ……？」

「駄目です」

「けちー！じゃあ怪我させて血紙めるからー!!」

拒否したら何故か再びやる気を出し始めた。何度も付き合うのは勘弁願いたいと思
い、フラツシユグレネードを複数（彼女は1つだと怯みもしない）使用し、全力で離脱
した。ルナよりも速いユウだからこそこれで逃げられるだろうが、他のゴツドイーター
なら確実に数秒足らず捕まるので如何にルナが規格外で、ユウが理不尽かはわかるだろ
う。

「ユウの馬鹿ー！たらしー！とーうーへーんーぼーくううう!!」

背後から響いた罵倒を聞き流そうとしたが、馬鹿以外は全く身に覚えがないので今度
あった時に訂正しようと思つたユウであつた。

余談ではあるがこのユウ、極東だけでもアリサ、カノン、リツカ等という面子に加え寄った様々な支部でも複数無意識に落としているので、そう罵倒されても仕方なかったりする。